

「陵水会旧蔵資料目録」解題

同窓会からの贈りもの(2完)

阿部安成

Yasunari Abe

滋賀大学 経済学部 / 教授

今井綾乃

Ayano Imai

滋賀大学 経済経営研究所 / 客員研究員

本稿共著者の今井綾乃が記すとおり(後掲)、わたしが陵水会の所蔵資料を整理し始めてから、ずいぶんと月日が経ってしまった。わたしの懈怠ゆえに目録1つの作成にこれほどの時間がかかってしまったことを、深く恥じる。

おなじく今井が記したとおり、同人は陵水会が発行する予定の同窓会史の編纂委員を担うとともに同会所蔵資料の整理にも着手して、さらに、2022年度には滋賀大学経済学部RA (Research Assistant) として同資料の解題執筆を始めた。共著者としてわたしが、今井執筆稿を必要に応じて整えて、本稿としてまとめた(執筆分担は個々に明示した)。

なお、かつて陵水会館内にあった同会所蔵資料は、本稿に記した今井と亀井大樹の調査と整理とを経て、2026年3月の時点では本学経済学部(附属史料館)に寄贈される見込みである。したがって、さきに発表した「陵水会所蔵資料目録(1)」(「資料紹介 滋賀大学経済経営研究所調査資料室報⑫」XⅢ同窓会からの贈りもの(1)『彦根論叢』第363号、2006年11月)に収載した資料もふくめてあらたに陵水会旧蔵資料の目録を作成することとした。資料目録の解題としては、さきの稿に連なるものとして副題ノンブルは連続する(2)とした。また、紙幅のつごうにより、「陵水会旧蔵資料目録」は別途、滋賀大学経済経営研究所発行のDiscussion Paper Series J-13(2026年5月)として発表した。

II 資料の概要

(今井綾乃)

陵水会は彦根高等商業学校(以下、彦根高商、と略記)の同窓会組織として、第1回生が卒業した

1926年3月に「彦根高等商業学校同窓会」という名で発足した(『会報』第1号、彦根高等商業学校同窓会発行、1926年、陵水会旧蔵)。彦根高商の文芸部が1929年11月に発行した『彦根高商学報』第21号(滋賀大学経済経営研究所デジタルアーカイブ参照、以下、研究所アーカイブ、と記す)に掲載の「第四回同窓会雑記」によると、1929年10月に開催された同窓会総会において、固有の名称を会に付けることが決議された。同窓会がほぼ毎年発行していた『会員名簿』(研究所アーカイブ)をみると、同年12月発行分の書名はすでに「陵水会員名簿」と付けられている。その1ページ目には「急告」として、同窓会会長である矢野貫城校長が同窓会を「陵水会」と名付けたことが伝えられている。1929年の末には、「彦根高等商業学校同窓会」は「陵水会」として活動していた。

陵水会は学校の変遷に伴い、会員の対象を拡大していった。1944年に彦根高商が廃され、彦根工業専門学校と彦根経済専門学校(1944年に生徒募集を停止。在校生が卒業するまで彦根工業専門学校に併置。1946年に生徒募集を再開)が設置されると、陵水会は両校の卒業生も自らの会員とした。1949年に新制大学である滋賀大学経済学部が新設されると、その卒業生も会員とした。1953年から1993年まで経済学部が付設されていた短期大学部の卒業生も、会員に加えている。さらに2017年に滋賀大学データサイエンス学部が経済学部と同じキャンパス内に新設されると、その卒業生も会員に迎えた。陵水会は100年にわたって母校とともに機能し続けてきた。

「彦根高等商業学校同窓会」として発足した当初、事務局は彦根高商の「学校内」に置かれていた(前掲『会報』第1号)。1938年に同窓会館として陵水会館が彦根高商の敷地内に建設されると、陵水会は事務局を同館へ移した。それ以来、陵水会

は今日に至るまで陵水会館で業務を遂行してきた。

その陵水会館において、彦根高商時から陵水会が保持してきた資料の一部は、2003年と2005年に滋賀大学経済経営研究所(以下、研究所、と略記)の調査資料室主任(当時)であった阿部安成によって整理、保存され、「陵水会所蔵資料目録(1)」として公開された(前掲「資料紹介 滋賀大学経済経営研究所調査資料室報⑫」XⅢ同窓会からの贈りもの(1))。阿部は陵水会の資料を整理する前の2002年から、調査資料室の業務として、研究所が当時所蔵していた彦根高商に関する資料の整理、保存をおこない、その目録を「彦根高等商業学校刊行物目録稿」として公開した(「資料紹介 滋賀大学経済経営研究所調査資料室報⑧」IX彦根高等商業学校の刊行物をたどる『彦根論叢』第350号、2004年9月)。その資料の一部は研究所アーカイブに掲載され、2026年3月時点においては閲覧することができた(研究所のホームページを、本稿の初校を受け取った5月8日にみたところ、研究所アーカイブが備えられている「滋賀大学経済経営研究所収集資料&デジタルアーカイブ検索システム」が5月31日付で停止されるという案内が掲載されていた。「滋賀大学経済経営研究所収集資料&デジタルアーカイブ検索システム停止のお知らせ」2026年5月7日、<https://www.econ.shiga-u.ac.jp/ebrisk/20260507.pdf>)。阿部は調査資料室の業務の一環として、陵水会が当時所蔵していた彦根高商に関する資料の整理、保存、公開にも着手したのである。

本稿では、阿部による「陵水会所蔵資料目録(1)」収録資料も含め、陵水会が彦根高商時から今日まで保持してきた資料の情報を「陵水会旧蔵資料目録」として公開する。その資料の総点数は3931点にのぼる。なお、2002年から阿部が整理した研究所所蔵の彦根高商に関する資料(「学校一

覧「彦根高商刊行物」)は、2024年8月に滋賀大学経済学部附属史料館へ移管された (<https://www.econ.shiga-u.ac.jp/ebrisk/shiryoikan0820.pdf>、同月20日付、2026年3月21日閲覧)。

筆者が陵水会旧蔵資料を整理、保存、公開する契機に、陵水会による同窓会史の編纂があった。陵水会は2023年を、彦根高商が創立されてから100年にあたる年と数え、その記念事業の1つとして同窓会をめぐる100年史の発行を計画した。編纂委員であった筆者(滋賀大学大学院経済学研究科博士後期課程、当時)は、同じく編纂委員である亀井大樹(同志社大学商学部助教、当時)による協力を得ながら、阿部の調査を引き継ぎ、陵水会が所蔵する資料を2017年12月から調査することとした。

陵水会が初めに調査を許可した場所は、2階建て陵水会館の1階応接間におかれていた書棚と2階の倉庫であった。まず整理を始めた1階書棚にはおおむね刊行物が並べられ、次いで着手した2階倉庫には多様な形態の物品が置かれていた。それらには例えば、段ボールに入れられた文書、陵水会がかつて使用していた花瓶や湯呑、会員からの書や記念品等の贈り物、彦根高商の学校旗を収納する箱、彦根高商時に作成された書、缶ケースに入れられた彦根高商生の個人情報に記載されたカード群がある。それらの多種多様な物品が置かれた2階倉庫に関しては、100年史の執筆に活用するためにひとまず、陵水会事務局が現用として参照しないとおもわれる、およそ1999年より前に作成された文書に限って整理することとした。

その作業と並行して、「陵水会所蔵資料目録(1)」収録資料の目録を改めて作成することとした。それらの彦根高商に関する刊行物と文書は、阿部の調査時には陵水会館の2階倉庫にあったが、筆者の調査時には陵水会館の2階倉庫から研究所

に移されており、同所が管理する貴重書庫の本棚に並べられていた。100年史の編纂のため、それらに資料番号をつけ、1つずつ中性紙の封筒に入れ、保存箱に収めながら目録を作成した。

調査を始めた当初は、陵水会館にあった刊行物と文書のみを目を向けていたが、2018年8月からはそれら以外にも調査をすることとした。その理由は、陵水会館の耐震補強工事が決まり、陵水会事務局の一時退去に伴って、不用品を整理する必要があるためである。陵水会事務局の職員と相談のうえ、陵水会館の2階倉庫、1階倉庫、2階の和室に置かれていた、会員からの寄贈品と彦根高商時の物品を保存することにした。

筆者はまた、陵水会が100年史編纂のために会員等から提供を受けた資料も整理した。陵水会は2018年2月から、滋賀大学彦根キャンパスで活動する学生団体や会員に対し、彼らが所有する文書、刊行物等の提供を呼びかけた。それに応じて陵水会へ寄贈された資料は、2026年3月の時点で668点にのぼる。

これらの整理手順を踏まえると、陵水会旧蔵資料はまず大きく2つに分けることができる。1つは陵水会が保持してきた資料である。もう1つは100年史編纂を機に陵水会へ寄贈された資料である。「陵水会旧蔵資料目録」には、「陵水会保持資料」と「100年史編纂時寄贈資料」との2つに分けて、それぞれの目録を提示した。

前者の陵水会保持資料は、さらに4つに分けることができる。第1が主に刊行物のまとまりであり、これらは初めに整理した陵水会館の1階書棚に並べられていた資料である。第2が主に文書のまとまりであり、1階書棚に次いで整理した2階倉庫に置かれていた資料である。第3が「陵水会所蔵資料目録(1)」に収録された彦根高商に関する刊行物や文書であり、2階倉庫に置かれていた資料であ

る。第4が会員寄贈品と彦根高商時の物品であり、第1と第2の整理が完了した後に陵水会館の各所から収集した資料である。資料の形態、資料が置かれていた場所、資料を整理した順の3つの要素をふまえて、陵水会保持資料は、「1階書棚資料」、「2階倉庫資料(2003年)」、「2階倉庫資料(2017年)」、「各所資料」の4つで構成される。陵水会旧蔵資料目録において陵水会保持資料は、これらの4つに分けて提示した。

100年史編纂時寄贈資料は、2つに分けることができる。第1が滋賀大学彦根キャンパスで活動する学生団体(学生会執行委員会、体育会、陵水新聞会、滋賀大学学園祭実行委員会)から提供された資料である。これを「学生団体寄贈資料」とよび、第2が陵水会員等から提供された資料であり、これを「個人等寄贈資料」とする。陵水会旧蔵資料目録において100年史編纂時寄贈資料は、提供者が学生団体か個人等かによって2つに分けて提示する。

陵水会保持資料	1階書棚資料
	2階倉庫資料(2003年)
	2階倉庫資料(2017年)
	各所資料
100年史編纂時寄贈資料	学生団体寄贈資料
	個人等寄贈資料

2026年3月の時点で、これらの資料のほとんどが研究所の貴重書庫に置かれている。陵水会館の耐震補強工事中、陵水会事務局は研究所の入る総合研究棟に移転していた。その間、1階書棚資料のうち卒業アルバムは陵水会事務局内のロッカーへ、それら以外は総合研究棟3階に備えられた陵水会ロッカーへ収められた。2階倉庫資料(2017年)、各所資料、学生団体寄贈資料、個人

等寄贈資料は「陵水会所蔵資料目録(1)」収録資料である2階倉庫資料(2003年)とともに研究所の貴重書庫に置かれた。2022年10月に工事が完了すると、陵水会事務局は筆者と研究所と相談のうえ、1階書棚資料のみを陵水会館へ移し、そのほかの資料を貴重書庫に残すこととし、現在に至る。

III 1階書棚資料 (今井綾乃)

1階書棚資料は、1950年から2017年までに刊行された主に図書と逐次刊行物(わずかに文書もある)で成る。それらには例えば、陵水会員が出版した詩集や自分史、滋賀大学経済学部(以下、経経部)に在職したことのある教員がまとめた学術書、陵水会や滋賀大学(学生団体を含む)が発行した刊行物や記念誌があり、陵水会事務局の職員や陵水会館に来館した会員が自由に閲覧することができる。1階書棚資料は、閲覧者が陵水会や会員の現況を知ることのできる資料、あるいは、自らの学生生活や過去の同窓会活動を懐かしむことのできる資料のまとまりといえる。なお、来館者がそれらを引き続き閲覧できるよう、陵水会は旧蔵資料のうち1階書棚資料のみ経経部へ寄贈しない予定である。

1階書棚資料のうち注目したい資料は、他大学の同窓会報である。それらのほとんどが、滋賀大学経済学部と同じ、高商を母体とする国立大学経済系学部(以下、旧高商系経済系学部、と略記)の同窓会会報であった。それらの同窓会名を挙げると、凌霜会(神戸高商)、鳳陽会(山口高商)、瓊林会(長崎高商)、緑丘会(小樽高商)、信陵同窓会(福島高商)、四極会(大分高商)、柑蘆会(和歌山高商)、富丘会(横浜高商)、又信会(高松高商)、越嶺会(高岡高商)であった。旧高商系経済系学部の同窓会のうち、如水会(東京高商)とキタン会

(名古屋高商)は会報を発行しているものの、陵水会はそれらを所蔵していない(如水会<https://www.josuikai.net/>、キタン会<https://kitankai.net/>、2022年11月8日閲覧)。他方で、旧高商系経済系学部には該当しない新潟大学人文・法・経済学部の同窓会による会報もある。

それらの会報には、陵水会の受領印が押され、各同窓会が2001年から2016年までに陵水会へ送付したものとわかる。いつから、なぜ会報が送付されるようになったのかはわからないものの、陵水会事務局の職員によると、陵水会もまた、自らの会報を各同窓会へ送付しているという。陵水会がこれらの旧高商系経済系学部の同窓会報を保存してきたことは、高商に由来する組織の各同窓会と接点を維持しようとする意思の表れである。

1階書棚資料において、彦根高商時に作成されたものはわずかしかない。それらを挙げると、彦根高商の卒業アルバム(1階書棚資料51-74)、陸軍省兵務部課編『教練教科書術科之部(職員用)』(軍人会館図書部、1941年8月、1階書棚資料353)、澤村寅二郎『MODERN ENGLISH NOVELISTS』(研究社、1924年、1階書棚資料298)、陵水会館の設立に関わる資料(1階書棚資料14-17)、「〈写真帳〉陵水会アルバム第11回総会(S11.4.26)第12回総会(S11.10.17)」(〈 〉は目録採録時に目録作成者がつけた記号。以下同。1階書棚資料242)と記された写真帳である。以下にそれぞれについてみよう。

彦根高商の卒業アルバムは、開設時に設置された本科(1939年度から本科は第一部と第二部支那科となり、後者は1941年度から第二部東亜科となる)と1927年度に新設された別科がそれぞれに作成したものがある。どちらの科も、すべての卒業年次分が揃っているわけではない。

卒業アルバムに掲載された写真は、どの年次の分も、その被写体や構成や編集の様式がいずれも類似している。例えば、卒業生や教職員の顔写真のほか、ゼミナール、語学ごとの集合写真、授業、クラブ活動、講演会、寮祭、遠足時等の様相を撮影した写真、である。また、卒業生と教官の寄せ書き、教官の似顔絵、卒業生の進路情報が載っている卒業アルバムもある。これらの卒業アルバムは、阿部が調査資料室の業務として2002年から始めた彦根高商に関する資料の整理、保存、公開の一環としてデジタル化され、研究所アーカイブで閲覧することができた。調査資料室はデジタル画像をプリント製本した複製版卒業アルバムを陵水会へ提供しており、その複製版卒業アルバムも、この資料群の1つを構成している(1階書棚資料26-50)。100年史の編纂では、研究所アーカイブに公開されていた彦根高商の卒業アルバムを活用している。

『教練教科書術科之部(職員用)』と『MODERN ENGLISH NOVELISTS』は、彦根高商で使われていた教科書であるとおもわれる。『教練教科書術科之部(職員用)』の表紙には「彦根高等商業学校教練用」と印字されており、同校が用いていたと推察できる。『MODERN ENGLISH NOVELISTS』は、その表紙に「第三学年C組 芳谷有道」と記されている。彦根高商が自らの沿革、学則、卒業生の勤務先等の基本的な情報を掲載した逐次刊行物の『学校一覧』各年度(研究所アーカイブ)によると、芳谷は彦根高商を1926年3月に卒業した本科1回生であり、のちに同校の教官となった人物である。[「会則原稿」[1926]](2階倉庫資料(2003年)532)によると、芳谷は陵水会の幹事として世話役も務めていた。彦根高商の生徒として使用していた同書を、芳谷が卒業後に陵水会館へ持ち込んだとおもわれる。

陵水会館の設立に関わる資料には、同窓会報の『陵水』第9号(1937年2月)と第10号(1937年4月)、「陵水会館建設寄附金募集趣意書」と記された印刷物とその草稿がある。『陵水』第9号の表紙には「陵水会館建設特別号」と、同誌第10号の表紙には「陵水会館建設寄附金募集経過報告号」と印刷されている。陵水会館は、彦根高商の創立15周年にあたる1938年に竣工した。『陵水』第9号と第10号には、その建設費の寄附を会員へ呼びかける「陵水会館建設寄附金募集趣意書」と拠金者の氏名、卒業回生、金額が掲載されている。なかでも第10号には、他の高商における同窓会館がいかにより多くの寄附者によって建設されたかが説明され、「少くとも同等以上」の同窓会館が目指された。その記述から、陵水会が他の同窓会を意識し、情報を交換していたことがわかる。なお、『陵水』の両号は、研究所アーカイブでも閲覧することができた。

「〈写真帳〉 陵水会アルバム 第11回総会(S11.4.26) 第12回総会(S11.10.17)」は、陵水会がおおむね年に2度運営について協議をした総会の様子を撮影した写真を貼ったものである。研究所アーカイブで『陵水』各号をみると、第7号(1936年)と第8号(1936年)に掲載された写真が、さきの写真帳に載る写真と同じであった。写真帳の写真は、陵水会が同窓会報の編纂に活用したとおもわれる。写真とともに載る総会報告記事によると、どちらの総会においても同窓会館の建設が議題の1つに挙がっていた。陵水会館の設立に関する資料の1つとして、陵水会は写真帳を保持してきたのかもしれない。

1階書棚資料には、彦根高商生が卒業後に作成した同期会や部の記念誌も多数ある。それらには、例えば1941年4月に入学した本科19回生と東亜科3回生との同期会である「啓佑会」が発行した『啓佑会 彦根高等商業学校本科第十九回卒・東

亜科第三回卒 卒業六十周年啓佑会創立三十周年記念文集』(2004年)と『啓佑会卒寿記念追録』(2012年)、彦根高商射撃部のOB会が発行した『ああ彦根：高商生の追懐』(1999年)や陵水会が母校の創立90周年を祝して発行した『わが青春の彦根』(2013年)がある(1階書棚資料370、371、389、500)。彼らの記念誌には、彦根高商で経験した教練、勤労働員の日々が回顧されるとともに、講義内容、担当教官、寮生活の印象等が記されている。執筆者の多くが1938年4月から1944年9月までに彦根高商(彦根経済専門学校)を卒業した生徒であった。記念誌からは彼らの戦時下における生活の一端を知ることができる。

記念誌の多くはまた、発刊時の個人の現況を知ることができる資料でもある。彦根高商生の情報が掲載された記念誌には、1929年3月に卒業した本科4回生の同期会である「昭四会」が発行した『昭四会員名簿 第28号』、1932年3月に卒業した本科7回生の同期会である「七水会」による『言葉のアルバム 彦根高商七水会卒業55周年記念号』、1934年3月に卒業した本科9回生の同期会である「九水会」が発行した『九水会記念文集：彦根高商卒業五十周年記念』、滋賀大学漕艇部の同窓会組織である「陵水艇友会」が発行した『偲湖：陵水艇友会75年』等がある(1階書棚資料376、377、364、442)。これらの記念誌は、彦根高商生が学校を卒業して以降の勤務先だけでなく、彼らの職務内容やそれまでの経歴を把握することができる資料である。陵水会が定期的に発行してきた『陵水会員名簿』とそれらの記念誌を照合することで、卒業生の動向を把握することができる。

1階書棚資料には、彦根高商の卒業生に関する資料として「〈書簡〉高商12回大里喜誠先輩を囲んで(昭和39年12月旧剣道場横にて)」もある(1階書棚資料437)。それは、滋賀大学経済学部で剣

道部にかつて所属していた卒業生が、部の先輩である大里について2013年に回顧したものである。書簡に添付された写真にはスーツ姿の先輩を囲む、学生服姿の学生たちが写っている。この資料から、部活動をととして彦根高商の卒業生とその後身にあたる滋賀大学経済学部 of 学生との間に接点があったことがわかる。

IV | 2階倉庫資料 (今井綾乃)

ここで主に示す2階倉庫資料(2017年)は、陵水会館の2階にあった倉庫で保管されていた文書(わずかに刊行物がある)のまとまりである。陵水会は、ほとんど活用しなくなった文書のうち、保存すべきと判断したものを2階の倉庫に置いていた。その倉庫は、2003年に阿部が陵水会から提供され「陵水会所蔵資料目録(1)」に収録した彦根高商に関わる刊行物や文書も置かれていた場所である。しかしながら、阿部への資料提供のさいに気づかれなかったとおもわれる、彦根高商時に作成した資料が残されていた。2階倉庫資料(2017年)は、それらの彦根高商時の資料も含めた、およそ2000年代以前に作成された文書のまとまりである。

それらの多くがファイリングされたり、封筒に収められたりしていた。例えば、陵水会の理事会議事録を収集したファイル、陵水会が母校に関する記事や会員の活躍を報じた記事をまとめた新聞スクラップのファイル、陵水会へ送付された会員からの書簡をまとめた封筒等である。2階倉庫資料(2017年)の多くは、陵水会事務局が日々の業務において作成したり、収集したりした資料である。

2階倉庫資料(2017年)のなかでも、1980年代に構想された滋賀大学の将来計画に関する記録の束に目いく(例えば、2階倉庫資料(2017年)

967-1023等)。その束には、母校の新しい構想について議論をする陵水会理事会の議事録、大学の将来計画に対する意見を記した会員の書簡、将来計画に関して報じた新聞記事等がある。これらを見ると、陵水会が同窓会として大学運営に強い関心をもっていたようすがわかる。

陵水会が各部活動のOB会名簿を収集しようとしていたことがわかる資料も、2階倉庫資料(2017年)にはある。「クラブOB名簿(平成6年～)」と記された箱に、各部活動から収集した卒業生名簿やその複写版がまとめられていた(2階倉庫資料(2017年) 684-721)。名簿には部活動に所属していた卒業生の現住所や勤務先企業だけでなく、職階が記されている場合がある。それらは、彦根高商から滋賀大学経済学部に至るまでの卒業生の現況を知ることができる資料である。

なお、2階倉庫資料(2003年)には、陵水会各支部の名簿もあり、それらにも発行時の卒業生の職階が記されている(2階倉庫資料(2003年) 351-372)。個人によっては、陵水会が定期的に発行してきた『陵水会員名簿』よりも詳細に、彼らの動向を検討することが可能である。

この資料群のうち彦根高商に関する資料には、陵水会が卒業生に関する情報をまとめた簿冊、収集した情報を収めた封筒がある。簿冊には、例えば「出征会員名簿」(2階倉庫資料(2017年) 1497)、「戦死者調査簿」(2階倉庫資料(2017年) 1498)、「出納簿 大正12年4月～昭和39年4月」(2階倉庫資料(2017年) 673)があり、封筒には支部会での寄せ書き、彦根高商の受験書類が入っていた(2階倉庫資料(2017年) 1520等)。これらの資料に記された情報が陵水会の同窓会報である『陵水』、『陵水会員名簿』に掲載されていた(研究所アーカイブ)。彦根高商時に作成された資料は、当時の陵水会が学校や個々の卒業生の現況を会員

へ伝えるために収集し、それらをまとめたものであった。

2階倉庫資料(2017年)には、阿部が2002年から調査した彦根高商に関する資料と関連する簿冊がある。その表紙には「彦根高商学報自第三四号至第一〇九号」と記されている(2階倉庫資料(2017年)1559)。研究所には『彦根高商学報』が第6号から第55号まで現存し、研究所アーカイブで閲覧することができた。それらの続号が、この簿冊には綴られている。2階倉庫資料(2017年)にも、彦根高商についてわかる資料があることに留意する必要がある。

V 各所資料 (今井綾乃)

各所資料は、陵水会館の耐震補強工事前に2階にあった倉庫や和室、1階にあった倉庫に残されていた寄贈品と物品のまとまりである。以下にそれぞれの資料についてみよう。

2階倉庫には彦根高商生が卒業後に陵水会へ寄贈したり、彦根高商時の陵水会が作成したりした物品が置かれていた。例えば、「恩師並びに学友之霊」、「恩師旧友物故者之霊」と記された2つの書は、陵水会が彦根高商の慰霊祭のために作成したとおもわれる(各所資料13、14)。書だけでなく、この資料群には彦根高商の校旗を入れる木の空箱、陵水会各支部の会合で彦根高商の卒業生が記した寄せ書きを貼りつけた2つの額、彦根高商を1926年3月に卒業した本科1回生の渡辺久夫による木彫りの仏像もある(各所資料18、11、12、17)。いずれも埃を被っており、誰にも触れられることなく長期にわたって2階倉庫に置かれていたとわかる。

2階にあった和室には、将棋盤と碁盤が置かれていた(各所資料1、3)。どちらにも「陵水」という

ラベルが付けられている。将棋盤の裏には「片岡彦一郎先生寄贈」、碁盤の裏には「原田博治先生大橋幸雄先生寄贈」と書かれている。『学校一覧』各年度(研究所アーカイブ)によると、3人は彦根高商に在職した教官であった。将棋盤や碁盤は、教官が陵水会へ寄贈したものであるとわかる。

1階にあった倉庫には、会員がつくった物品が置かれていた。それらには、1932年3月に彦根高商を卒業した本科7回生の同期会である「七水会」が卒業40周年記念で集まった際に作成された寄せ書き、1934年3月に卒業した本科9回生の同期会である「九水会」が製作した盾等があった(各所資料7、5)。彦根高商の卒業生がそれらの記念品を陵水会へ寄贈したのだろう。

この各所資料には、阿部が2002年から整理した彦根高商に関する資料とつき合わせることで、その資料の作成に関わる情報を捉えることができるものがある。例えば、表面が剥がれて書かれた文字の一部がわからない「彦根高等商業学校 正誼謀〔 〕黎元〔 〕」(〔 〕は、字が判読不明であることを示す)と記された書が陵水会館2階にあった倉庫に残されていた(各所資料19)。その書の写真が、2003年に阿部が陵水会から預かりデジタル化した、第1回卒業生の卒業アルバム『SOUVERNIR1926』に掲載されている。その写真をみると、書かれていた文字は「彦根高等商業学校 正誼謀利 黎元洪」であるとわかる。卒業アルバムのその写真の下には、「April.1924 黎元洪氏来校記念」というキャプションとともに、黎元洪を中心として彦根高商の教職員、生徒が学校内で並んでいる集合写真が収録されていた。陵水会館2階にあった書は、黎元洪が彦根高商に来校した記念に書いたものであるとわかる。

黎元洪が彦根高商に来ていたことは、『大阪朝日新聞』滋賀版の1924年4月13日付朝刊1面に報

じられた「黎元洪夫妻琵琶湖見物」と18日付朝刊1面に報じられた「黎元洪氏と彦根町の歓迎」見出し記事からもわかる。それらの記事によると、彼は中華民国前大統領であり、1924年当時は別府温泉で生活しており、琵琶湖周遊のために滋賀県を訪問したという。黎元洪は県内の各方面を訪ねたほか、彦根高商で講演もおこなったと報じられている。彼の来県を調整した人物は、大津市の出身であり、東亜同文書院を卒業した奥村義盛だとされている。『陵水三十五年』（陵水三十五年編集会編、1958年）によると、奥村は1924年9月に彦根高商の講師となっており、黎元洪を学校に案内したあとに着任した。その後、彼は1943年まで講師として支那語や海外経済事情を担当していたことが、『学校一覧』各年度（研究所アーカイブ）から確認できる。黎元洪の滋賀県訪問は、奥村が彦根高商の教官となる契機の一つであったかもしれない。

黎元洪による書のほかにも、さきに提示した将棋盤と碁盤についてわかる資料が、阿部が整理した資料にある。それは陵水会が受けた寄贈品名、寄贈者、受領年月が記された「商品寄贈台帳」であり、2階倉庫資料（2003年）の1つである。その台帳をみると、陵水会が片岡彦一郎、原田博治、大橋幸雄教官による将棋盤と碁盤を、1938年12月に受け取っていたとわかった。1939年1月に発行された『陵水』第16号（研究所アーカイブ）によると、陵水会館の落成式が1938年11月であったことから、将棋盤と碁盤は教官3名による同窓会館の竣工の祝いの品であったといえる。

これらの将棋盤と碁盤が置かれていた陵水会館の和室には、彦根高商の校章が彫刻された欄間が備わっていた。陵水会館の耐震補強工事前に、阿部による助言でその欄間を取り外し、保存することとした（各所資料9）。「陵水会館設計図書院欄間透之模様図」（2階倉庫資料（2003年）49）

をみると、その欄間は設計図の作成当時と変わっていないことがわかる。

このとおり、陵水会が保持してきた寄贈品と物品の一部は、阿部が整理し研究所が当時所蔵していた彦根高商に関する資料や、2階倉庫資料（2003年）や同（2017年）と照らし合わせることで、それらの作成に関する情報を知ることができる。

VI | 学生団体寄贈資料 （今井綾乃）

学生団体寄贈資料は、滋賀大学彦根キャンパスで活動する学生団体の部室から2018年に収集した資料のまとまりである。学生の部活動や同好会をとりまとめている7団体（学生会執行委員会、体育会、文化サークル連合、友愛会、陵水新聞会、滋賀大学学園祭実行委員会、ゼミナール協議会）と、滋賀大学彦根キャンパスの学生寮である偲聖寮に対し、陵水会から資料の提供や寄贈を依頼した。それらのうち学生会執行委員会、体育会、陵水新聞会、滋賀大学学園祭実行委員会の4団体から資料を寄贈する旨の連絡があり、亀井と筆者が各部室を調査した。なお、残る3団体からは、資料が現存しないとの報告を受けた。

学生会執行委員会からは、部室に保管されていたほとんどの資料の寄贈を受けた。それらの多くが、1970年から2012年までに同会とその前身組織が作成した文書であった。具体的には、これまでに滋賀大学彦根キャンパスで同会が開催した学生大会の議事録、現役学生と教職員の交渉の場である「SFA会議」（Shiga faculty Allianceの略）に関する議事録のほか、目を引く資料として「経自執委70年十統合問題資料記録」と「経自執委70年記録NO.2」と表紙に記された2冊のノートがある（学生団体寄贈資料28、96）。どちらのノートにも、学生運動の計画や目的、団交時の大

学側の対応や反省が記されていた。学生会執行委員会による資料をみわたすと、滋賀大学彦根キャンパスにおける学生自治組織の変化や学生が抱いた大学に対する考えを知ることができる。

体育会からは、部室にあった1973年から1995年までに作成された資料の寄贈を受けた。それらは体育会が主催していたコンサートのパンフレットやその様子を撮影した写真のアルバム等である。パンフレットや写真をみると、学生だけでなく地域の人々がコンサートに参加している様子がわかる。コンサートの開催は体育会による地域貢献の1つであった。

陵水新聞会からは、同会が編集発行してきた『滋大陵水新聞』の寄贈を受けた。それらは部室にあるすべての『滋大陵水新聞』であり、1955年9月発行の第19号から2016年8月発行の第342号までである(ただし欠号あり)。陵水新聞会に1部しかない号は複写をとり現物を返却し、複数部ある号は1部の寄贈を受けた。また、榎本雅之滋賀大学経済学部准教授(当時)がかつて陵水新聞会から研究のために譲り受けた号も、陵水会に寄贈された。なお、『滋大陵水新聞』は個人からも提供があった(個人等寄贈資料12ほか)。

寄贈を受けた『滋大陵水新聞』を発行順にみると、紙面の内容が次第に変化していくことに気づく。1950年代から1970年代までの紙面では学生運動の様子や社会問題が報じられ、1980年代に入ると滋賀大学に在職する教官の研究紹介や学問に関する議論が掲載されるようになった。1990年代以降になると、滋賀大学のキャンパスに新設された施設の紹介や学内で行われた行事を紹介する記事が掲載されるようになる。このように『滋大陵水新聞』から学生の関心が変化していくことを捉えることができる。

滋賀大学学園祭実行委員会からは、彼らが主催する「滋大祭」のパンフレットの寄贈を受けた。ただし、彼らの部室には資料がほとんど現存しておらず、2013年以降のパンフレットの提供を受けた。個人からも数点の寄贈を受けている(個人等寄贈資料51ほか)。

VII 個人等寄贈資料 (今井綾乃)

個人等寄贈資料は、陵水会による100年史編纂を機に、主に会員から寄贈を受けた資料のまとまりである。当初は、編纂委員からの寄贈が多かったものの、次第に会員による提供が多くなっていった。それらには、寄贈者が滋賀大学経済学部在籍していた当時の講義資料や試験問題、新入生オリエンテーションで配布された資料が多い。

彦根高商に関わる資料に注目すると、次の4点があった。1点目が、これまでに現存が確認されていなかった彦根高商の卒業証書である(個人等寄贈資料49)。滋賀大学名誉教授の酒井泰弘より、彦根高商を1929年3月に卒業した義父の岩佐芳次郎の卒業証書の寄贈を受けた。残る3点は、いずれも彦根高商を1936年3月に卒業した栗田彪の手による在学時の写真を貼ったアルバムである(個人等寄贈資料88-90)。栗田が卒業した静岡県立浜松第一中学校、現在の静岡県立浜松北高校の同窓会が、陵水会へそれらを提供した。陵水会事務局の職員によると、栗田の遺族が彼の学生時代の遺品を浜松北高校同窓会へ提供したという。その中に彦根高商時の様子を撮影した写真をおさめたアルバム3点があり、陵水会が100年史を編纂していることを知った浜松北高校同窓会が、陵水会へ寄贈を申し出た。3点のアルバムには、彦根高商における部活動や遠足の様子を撮影した

とおもわれる写真が掲載されていた。彦根高商生のふだんの様相を知る資料の1つである。

なお、個人等寄贈資料には彦根高商の東亜科を1943年9月に卒業した澤田清から、筆者が提供を受けた図書も含まれる。澤田は長浜商業学校から彦根高商に入学し、卒業後に海軍士官学校へ入り、のちに住友銀行へ就職した。彦根高商入学前から社会人時代に使用していた図書を2013年に譲り受けた。図書には彦根高商の教官であった桑原晋の『経済原論教材』(有朋堂、1940年)があり(個人等寄贈資料236)、同書には「経済原論の教材として蓄積した内容を製本した」と記されている。

VIII 陵水会旧蔵資料の活用 (今井綾乃)

陵水会は、100年史である『陵水百年の記録:彦根高商創立百周年記念』(以下、『記録編』、と記す)と『陵水百年の記憶:彦根高商創立百周年記念』(以下、『記憶編』、と記す)を2024年3月に発行した。『記録編』は資料に基づく母校と陵水会の歴史の叙述であり、『記憶編』は会員による回顧集となっている。その編纂方針からわかるとおり、『記録編』には資料として陵水会旧蔵資料が多く活用されている。また、回顧集である『記憶編』においても、陵水会旧蔵資料の一部が使われた。彦根高商や彦根経済専門学校を卒業した会員による寄稿がわずかであったため、編纂当時は研究所が所蔵していた彦根高商の刊行物のほか、陵水会旧蔵資料の『彦根高商学報』に記された文章から学生生活を振り返った部分を『記憶編』に一部を転載したのである。陵水会旧蔵資料は、『記録編』と『記憶編』のどちらにも活用された。

『記録編』における陵水会旧蔵資料の活用具合をみよう。例えば、筆者が執筆を担当した彦根高商の誘致運動については、「創立座談会原稿」

(2階倉庫資料(2003年)125)をもとにその大まかな経過を明らかにした。また、彦根高商時の陵水会の様相として、「十五周年記念事業関係書類」(2階倉庫資料(2003年)491)等から、母校とその生徒とともに記念行事を実施していく様子を示したほか、「〈書簡〉陵水会館設計図について」(2階倉庫資料(2003年)99)からは彦根高商の教官でもあり卒業生でもある2人が、陵水会の幹事として同窓会館の建設のために設計事務所と連絡を取っていたこともとりあげた。「出征会員名簿」(2階倉庫資料(2017年)1497)と「戦死者調査簿」(2階倉庫資料(2017年)1498)からは、陵水会が会員の出征や戦死の情報を収集していたことを明らかにし、「陵水会卒業生大会議事録」(2階倉庫資料(2003年)311)を活用して、第二次世界大戦後に陵水会員が集まり、陵水会の組織改編や活動方針を議論したことを記した。『記録編』において、陵水会旧蔵資料にある彦根高商時の資料は、学校の仕組みよりも、陵水会の活動を示す材料として活用されたといえる。

陵水会旧蔵資料には、1950年代から1960年代に作成された資料が少ない。そのため、『記録編』ではその時期の記述には陵水会旧蔵資料はほとんど活用されておらず、1970年代以降の記述に使われた。例えば、陵水会旧蔵資料を整理した亀井は、「〈ファイル〉大学側将来計画他」(2階倉庫資料(2017年)440)や「陵水会年報」各号(1階書棚資料156ほか)等から陵水会と母校との関係の変遷をたどり、多様化していく陵水会の事業をたどった。また、「渉外ノートH2.6.20」(学生団体寄贈資料121)や学生団体寄贈資料の「滋大陵水新聞」各号(学生団体寄贈資料122ほか)等から、学生生活の様相を示した。1970年代以降の記述においては、陵水会や学生生活に関する記述に陵水会旧蔵資料が活用されている。

『記録編』の特徴として、本文の記述内容に関連する写真やコラムにおいて、陵水会旧蔵資料を紹介した点が挙げられる。例えば、写真として「彦根高等商業学校支那科昭和 十四年度受験票」(2階倉庫資料(2017年) 1520)、「総会関係書」(2階倉庫資料(2003年) 223)、「昭和十八年度事変関係書類綴」(2階倉庫資料(2003年) 48)等が示され、コラムとして阿部「同窓会からの、おくりもの」、亀井「学内唯一の報道機関『滋賀大学陵水新聞』」、今井「陵水会資料の紹介(1)」と「同(2)」、「体育会主催のフォークコンサート」が掲載された。このとおり、100年史には陵水会旧蔵資料が豊富に活用されている。

IX | おわりにかえて

本稿では、陵水会による同窓会史の編纂を機に、編纂委員である筆者を中心に2017年12月から整理し始めた資料を「陵水会旧蔵資料目録」として、その解題を記した。陵水会は、彦根高商時から今日に至るまでほぼ同じ場所で機能しながら学校、生徒や学生、教職員、卒業生、他の同窓会との接点を維持してきた。そのつながりをとおして、陵水会が収集し保持してきた資料と、同窓会史の編纂のために学生団体や会員等から提供を受けた資料が、「陵水会旧蔵資料目録」収録資料である。それらの資料からは、彦根高商の様相だけでなく、生徒の卒業後の動向を詳細に追跡することができる。また、在籍時の生徒の様子と卒業後の彼らの動向をむすびつけて、検討することもできる。高商を考えると、後身にあたる大学機関の資料だけでなく、同窓会が保持してきた資料も検討する必要がある。

(今井綾乃)

旧制官立高商ではどこでも同窓会が組織され、それが第二次世界大戦後の新制国立大学を構成する経済系学部などにおいても継がれ、さらには国立大学法人の同学部などにおいても同様のであろう。そうした同窓会と学校や学部・大学とのあいだには強く強い結びつきがうかがえ、そのようすは、たとえば、「在校生に対する支援や学校および教員に対する支援について卒業生が非常に強い結束力を持つ同窓会」という自負にあらわれていよう(陵水会ホームページ「陵水会とは」、2026年2月10日閲覧)。彦根高商の創立から100周年を記念して2024年に陵水会によって編集、発行された『陵水百年の記録—彦根高商創立百周年記念』と『陵水百年の記憶—彦根高商創立百周年記念』は、大学も学部も大きな区切りの記念史誌を刊行できなかったなかでは、さきの「強い結束力」をうまくいかに発揮したその証だともみえる(陵水会では同書を「滋賀大学陵水100年史」ととらえてみせる。同会ホームページ「陵水100年史」、同前閲覧)。

かつて陵水会がみずから保管していた文書や図書などを、本学経済学部卒業生の今井と亀井が調査、整理したそれらの成果が、前掲の100年史の執筆にもそこそこに活用され、同窓会に残る歴史資料の目録が作成され、それが公開された例は、ほかの旧高商系経済系学部ではほとんどないのではないかと。同様の学部ではどこも、旧高商時の同窓会と大学なり学部なりとがいまも緊密なつながりを築いているといえようが(たとえば、長崎高商-長崎大学経済学部の同窓会である瓊林会は、『長崎高商から長崎大学経済学部へ六十年の歩み』を1965年に、『長崎大学経済学部創立110周年記念誌』を2015年に発行している。ただし、同会所蔵資料の目録をわたしは知らない)、そうした同窓会の文書や図書などをていねいに調査、

整理、目録作成にまでいたった業績は、本学部ならではのと称揚したくなる、いいや、今井と亀井ならではの尽力というべきだった。歴史資料の目録は、その史料のぐあいと量に応じて作成にはそれなりの時間がかかる。しかも、とても地味な作業だ。史料目録を熱心につくる研究者は、そう多くはいないうえに、しかも、しっかりと目録をつくったとしても、研究業績としての評価点は低い。

あらためて、その調査と整理に着手した今井と亀井の労をねぎらい感謝し、目録を作成し終えた今井の作業を、ここに讃える。

今井は、2022年11月から2023年2月までのあいだ、滋賀大学経済学部¹の予算による「保存期間切れの法人文書並びに大学史関係資料の整理及び目録化作業」(2022年11月11日共通事務部総務・企画係(企画担当)宛てEメール添付提出文書「実施計画書」記載の「事業名」²。傍点引用者)の事業に従事して、同学部書類庫に残る彦根高商から新制滋賀大学経済学部³にかけての、また後者にかつてあった経済短期大学の大学史関係資料の目録づくりをおこなった。その業務内容の1つが、「保存期間切れの法人文書を1点ずつ目録化」(同前記載の「業務内容」⁴。傍点引用者)だった。同人の研究者としての正当な評価のためにも、同目録のすみやかな公開許可を望む。

ところで、本稿の最終調整をしているそのさなかに、『朝日新聞』社説(2026年3月22日朝刊)が国立西洋美術館や東京国立博物館などを対象として政府が示した中期計画をとりあげた。その題目が「博物館と美術館 頼るのに軽んじるとは」。その目標とは、「展示を行う12館について、展示にかかる費用を、運営費交付金など公費でなく、入場料など自己収入でまかなうよう求めた。」のにくわえて、「現状の平均約50%の自己収入比率を、各法人全体で5年後までに65%以上、10年後までに

100%にするとした。」。これを社説子は、「「稼げ」という圧力がさらに強まった。」と評した。

「国立館に求められる役割は、「稼げる展示」なのか。」との問いは、「国立館は調査研究や資料保管の比重が大きい。」(傍点引用者)、「自己収入に影響する入場者数は、立地や展示品の性質にも左右される。」(同前)との勘案事項の提示をあわせて、「国立館は、国に「依存」する「お荷物」ではない。」との寸鉄の刺しこみにいたる——「文化財や資料、美術作品を、保管し未来のために生かす責任は、国にある。文化や歴史を軽視していないなら、その責任を果たして欲しい。」と詰め寄る。

もちろん社説子は、「現実味」のある「自主財源の拡大を目指す必要性」をも承知している。そのうえで、「経済の行き詰まりを打破する手段として、文化に頼る。にもかかわらず、経済性の指標を一方的にあてはめ、文化を守り育む行為を軽んじる。それは身勝手というものだ。」と稿を結んだ。くりかえせば、「頼るのに軽んじるとは」というわけだ。

「滋賀大学経済学部は、2023(令和5)年、その前身である(旧制)彦根高等商業学校の創設から数えて 百周年を迎えました。」との年月を数える姿勢は、それを、つぎの、なにに、つなげようというだろうか(滋賀大学経済学部HP。2026年3月31日閲覧)。「滋賀大学経済学部は、前身である彦根高商の創立から「経世済民」を学ぶ場として発展し、2023年に100周年を迎えました。／「士魂商才」の精神を重んじ、実学を実践してきた彦根高商。この「彦根高商のDNA」に、「AI・データサイエンス」、「Liberal Arts & Art」という、“3つのA”が融合した学びによって、データと人間社会を見る目を駆使し、次の100年の発展に貢献できる人材育成に務めてまいります。」とのなんと涙ぐましい作文をみた(「滋賀大学市民講座」2024年6月16日第4回のフライヤ。最後は、努めてまいります、ではないか)。

それこそ彦根高商由来のというのであれば、その歴史に「経世済民」「士魂商才」を位置づけなければ、歴史屋はこうした呼号に納得をすることはない。「彦根高商のDNA」とはなにか、と問われたら、その直前にある、「「士魂商才」の精神を重んじ、実学を実践してきた」こと、と答えればよいのだろうか。それならばやはりこれまた、「士魂商才」の語とその用法を、彦根高商から滋賀大学経済学部にしたる歴史のなかにたどって示さなくては、もちろん歴史屋がそれを肯じない。

経済学部のゆきづまり打破する手段として、文化に頼る。それにもかかわらず、経済なるものが信奉する指標をただあてはめて、文化を守り育む行為を軽んじる——歴史に頼らざるを得ない、しかし、それを明らかにする史料を軽んじる……いまの風潮か。

そう、ところでまた、2019年度国立大学法人入学式での祝辞というと、4月12日に举行された東京大学の入学式での上野千鶴子名誉教授のそれが思い起こされる。「学内外で反響を呼んだ。」（「東大入学式2019・上野祝辞アンケート分析① 回答傾向の分析から」東大新聞オンライン2019年5月28日、2023年4月5日閲覧）との形容がつくその祝辞は、総長のではなく名誉教授の言だった。上野の祝辞を報じた『朝日新聞』（同年4月13日朝刊東京本社版）の見出しは、「性差別の横行 東大も例外ではない」（記事署名増谷文生）。この文言がある祝辞から、記事はつぎの箇所を引用した——「世の中には、頑張っても報われない人や頑張ろうにも頑張れない人がいる。恵まれた環境と能力を、自分が勝ち抜くためだけに使わず、恵まれない人々を助けるために使ってほしい」。

これは、競争という勝敗や優劣や先後の争いにおいても、ひとに勝つことやひとよりも優位にたつことをめぐる指標を絶対視するな、その指標がす

でに公正ではないばあいがある、との差異への再考をすすめる祝辞である。

おなじ2019年度の入学式(4月4日)で、みずからが所属する大学の唯一性を言祝ぐ式辞を述べた学長がいた——「通常、国が大学や学校を開くときはまずは県庁所在地に開設しますが、彦根高商だけは天津ではなく彦根の地におかれました。」（滋賀大学ホームページ＞大学紹介＞組織と運営＞学長室＞メッセージ＞平成31年度学部入学式式辞、2019年4月13日閲覧。傍点引用者）。

この式辞について、同月13日に滋賀大学総務課広報室広報係に、上記引用傍点箇所の正否を尋ねたところ、同月16日の同室からの返信で、「学長に確認し」たところ、誤りがあり、「だけ」の2文字を削除したとのことだった。

ほかとは違う、ほかよりも抜きんでている、と持ちあげるよりは、ほかと違うといいたくなったら、なぜそうなのかを比較という観点から問うたほうがよい——というよりも、まず事実を確かめるほうが、ささか。

壇上での発信から4年を経てなお参照される上野千鶴子の祝辞と違って（「素粒子」『朝日新聞』2023年4月12日夕刊）、「だけ」の2文字を削除した学長式辞はいま、その大学のホームページのどこをさがしても、もはやみることができなかった（2026年4月6日検索。もっとも上野千鶴子の祝辞も「※一部事実と異なる表記がありましたので、4月16日付けで修正しました。」とのこと。「平成31年度東京大学学部入学式祝辞」https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/president/b_message31_03.html、2026年4月4日閲覧）。

（阿部安成）

【附記】 本稿は、2025年度科学研究費助成事業
基盤研究(C) (一般) 課題番号25K04418「産業
化における同時代史としての高等商業教育をめぐ
る比較実証研究」(研究代表者滋賀大学経済学
系阿部安成)と2025年度滋賀大学経済学会公募
型特別事業「東アジアをフィールドとした産業化
時代における高等商業教育のグローバル・ヒスト
リー—その比較実証史研究」(事業実施代表者
滋賀大学経済学系阿部安成)の成果の1つである。

